

優秀賞

# 恐怖を忘れない

(中国) (有)美保運輸 安田美月

病気等を持たない多くの人間は、“死”というものをどこか遠くに感じているのかも知れない。

私の両親は運送業を営んでいる。小さい会社であったし、台数もさほどあるわけではなかったが、それでも事故というものは起きてしまう。幼かった私は、事故というものを理解していなかったが、事故の対処に追われる両親の姿はよく覚えている。それから時間が経ち、事故という言葉の意味を理解し、自分でも運転するようになった頃、私の目にある光景が飛び込んできた。

一花を手向ける女性。彼女の視線の先には、お供えものと思われる、多くの花などが置かれていた。家族だろうか。友人だろうか。それとも事故を知って、通りすがった他人だろうか。彼女はただ静かに手を合わせ、しばらくそこを見つめたまま、じっとしていた。

私はふと、気になった。彼女の目が。一点を見つめるその目には何を想っているのだろうか。怒りー。憎しみー。それとも、悲しみだろうか。私は彼女が去った後も、しばらくそこを動けずにいた。

あの時の私の目を逸らせなくしたのは、あの時の私の体を動かなくしたのは、何だったのだろうか。それは今でも分からない。ただ、あのとき初めて知ったのだと思う。事故というものの本当の意味を。

あれからというものの事故のニュースや記事を、心を通して見るようになった。ただの情報としてではなく、そこに書かれた想いやあらゆる感情を私はただただ刻みつけるのだ。「一つの人生が狂えば、それにつられて狂う人生もある」私の心の中にあって、消えることのない言葉だが、この言葉は、事故についても、言い得て妙だと思う。

最近、私の祖父が亡くなった。それから1年。連れ合いだった祖母はみるみる痩せていった。子の起こした、親の起こした事故又は事件で、それを償うように自殺した人がいた。あらゆる苦痛の中で、耐えることに疲れた少女又は少年が自殺した。それを追うように自殺した人がいた。

私は思う。事故によって失われた命に嘆き悲しむ人たちを。その命の周りにあった多くの命や心を。目に見える命という形だけでなく、目に見えぬ多くのものを奪ってしまうという事実を。そして何かを

失うのは被害者だけではないということ。

先日、ある話を聞いた。何台にも連なった玉突き事故の話だったが、事故を起こした運転手は当時、酒を飲んでいて。普段は全く飲まない、真面目な人だったという。たまたま事故の起きた当時、家庭でもめていた為による飲酒だった。

その後、彼は幼い我が子と妻を残して自殺したと聞いた。その事故の責が彼にあるのは火を見るより明らかであったが、それでも何とも言えない気持ちになった。

私は運転する度に思い出す。花を手向ける彼女や自責の念に駆られ、自殺してしまった彼のことを。その度に私は恐怖する。そして、その恐怖を大事にする。恐怖を知りながら、感じながら、私は運転することで、自分の持てる限りの注視をし、こうなるかも知れない、ああなるかも知れないと、あらゆる可能性を考えることが出来るからだ。

テレビに流れるニュースは日々変わっていき、忘れられる出来事の方が多いだろう。何かあった時は、こうしていれば良かった。これからは、こうしよう。それもすぐに忘れてしまう。だから私は感情を忘れない。恐れを受け入れる。奪ってしまうことの恐怖、苦しみ。失ってしまうことへの恐怖、痛み。それを抱えながら私は運転する。誰からも、何も、奪ってしまわないように。誰にも何かを奪わせない為に。